

◎韓日の「原故郷」を探して

◎釜山詩十篇(2005/9・6-8) 鈴木比佐雄



「朝鮮通信使」の文化活動に協力して頂けませんか。そう語りかけてきて名刺を交換したのは、朝鮮通信使文化事業会の金慶華局長だった。二〇〇五年二月四日、釜山学生教育文化会館で開かれた李秀賢さんの四周忌に招待され、私は新たにその日のために書いた追悼詩「黒ダイヤを燃やす原故郷の人」を朗読した。韓国語でも翻訳者の保坂祐二さんが朗読してくれた。その会が終わり、李秀賢さんの父の李盛大さんに挨拶をし、母の辛潤賛さんとは詩の話などをした後だったと思う。金局長のこの一言がなければ、私は再び九月七日の「韓日ジャズ公演」のために日本のジャズバンドを連れて、こんなに早く釜山の地を踏むことはなかったろう。

李秀賢さんの追悼詩を釜山で読んで下さいませんか。そのように友人で世宗大学政治学博士の保坂祐二さんから年の初めに話があった時、私の中で李秀賢さんの魂から呼ばれている気がした。保坂さんは李秀賢さんの在籍していた高麗大学の先輩であり、私の詩の良き理解者だった。二〇〇一年一月二十六日の新大久保駅で、線路に落ちた日本人の酔っ払いを助けるために李秀賢さんが命を落とした。その報道を聞いて私は李秀賢さんの精神には、韓国と日本の根底に国境を越えた共有すべき「原故郷」があり、それを見出し、創り出そうとする可能性を秘めていたと感じた。彼の命の切断に胸の奥が悲しみに痛んだ。私は彼の追悼詩「春の天空」を習いたての韓国語と日本語の両方で書いた。私は学生時代に哲学を専攻した。二十世紀の哲学を切り拓いた現象学の創始者であるフッサールが晩年に「ヨーロッパ」を「原故郷」と考えて、ナショナリズムを超える根源的な拠り所を模索したことを学んだ。当時ナチスが権力を持ち出した時に、故郷と異郷の根底に「原故郷」を見出そうとしていたフッサールの精神の在り方は、対立するものの底に共通の基盤を見出そうとする現象学の根源的な志向性だった。私は学生時代から詩と詩論に関心を持ち三十年も書き続けているが、

自分が詩作する際にこの「原故郷」というまだ見ぬ世界だが、我々の根底に確かに存在する場所を探し続けているのだ。

どうしたら李秀賢さんの精神を生かすことができるだろうか。彼の高貴な精神が韓日の二十一世紀の扉を押し広げたのではないか。二十世紀の日本の代表的な詩人宮沢賢治は、一九二六年に『農民芸術概論』で「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と記していた。それから八十年後に李秀賢さんの実践した精神を韓日の深い基礎に据えなければ、これからもきっと訪れる韓日の困難な情況を乗り越えていけないだろうと痛感したのだ。

鈴木さん、日本のジャズバンドをご紹介下さいませんか。春になったころ日本語の堪能な「朝鮮通信使」の李笑美さんを通して正式な依頼があった。仕事上の私にすまなそうに電話をしてくれる金さんの心づかいに私はとても好感を抱いた。ちょうど独島（竹島）問題が大騒ぎになりかけてきた頃だった。私は金局長と李さんたちと一緒にこの困難な情況を必ず乗り越えていこうと考えていた。

田中さん、釜山に本物のジャズを聴かせに行きませんか。こう私は日本でも有数なクラリネット奏者である友人の田中正敏さんに提案した。田中さんは二つの大学でクラリネットを教えながら、クラシックからジャズまで幅広くコンサート活動に挑戦し続けている。田中さんは韓日友好の意義を深く理解してくれ、現役のジャズ奏者の中からサックスの右近茂さんを指名して彼に入選を任せた。金局長も二度来日をして、私や田中さんと打ち合わせをし、正式な契約書も取り交わしたのだった。田中さんから依頼されバンド名は私が東京ファイブ・ブリッジと付けさせてもらった。その下準備に李笑美さんと数え切れないほどメールや電話で打ち合わせをしたことは、よき思い出になった。李笑美さんの謙虚で誠実な声を電話で聞く度に、私は真に韓日の友好を願って働く韓国の若者の美しい心を感じた。李秀賢さんが生きていたら、きっと李笑美さんのように韓日の架け橋になって活躍していただろうと思うと、ご両親の悲しみの深さを思いやった。

釜山はあまりに遠く、陰しいですね。と語り冷静な田中さんも心配顔だった。右近さんを始めピアノの八木隆幸さん、ベースの酒井一郎さん、ヴォーカルの福田良子さんらも機体の衝撃的な揺れに不安そうだった。九月六日は台風十四号が九州に上陸している状況で、飛行機は金海国際空港に車輪を降ろしたが横風で浮き上がり、成田空港にまた引き返すというハプニングがあった。そのため公演当日の七日朝の飛行機で再び釜山に向かったのだった。幸いにも昼からのリハーサルには何とか間に合って良かった。命がけの釜山行き飛行機に乗った共通体験で、私たちには言葉では表されない団結心がわき上がってきた。田中さん以外の演奏を初めて私は聴いたのだが、彼らは本当のプロだと感じた。特に右近さんのサックスの音は何と色っぽいんだと驚いた。また八木さんは天才じゃないかと思うほど華麗なテクニックだった。また酒井さんの安定したベースの響き、そしてオペラ歌手とも思える声量と雰囲気を書き交わす福田さんだった。

東京ファイブ・ブリッジを連れてきてくれてありがとう。そういう言葉を何度も聞き誇らしかった。田中さんや右近さんの二人のクラリネットが内面に語りかけてくるスタンダードジャズの魅力は、ジャズの素晴らしさと奥深さを伝えたとと思う。また「上を向いて歩こう」や「さくら さくら」という日本を代表する曲も、独創的なものに感じられた。福田さんの声量が国境を越えて釜山の人々の魂を揺さぶったと感じた。右近さんと福田さんからは韓国語の簡単な挨拶文をホテルから会場に行く間に頼まれ書いたが、その言葉が二人から読まれたときに、会場の拍手がより多くなったことはとても嬉しかった。

鈴木さんに、ビールをついであげてくれ。となりのテーブルから金局長の大きな声が聞こえた。金局長の感謝の気持ちが本当に伝わってきて胸に染みた。公演の後に打ち上げの慰労会をジャズクラブで開いてくれたのだが、右近さんたちはお礼にと言って一時間以上も演奏を続けたのだ。途中で韓国の若いジャズ奏者もステージに上げ、一緒に演奏する姿は見て、これこそが韓日友好の本来的な姿だと思った。執行委員長の姜南周さんからも感謝の言葉を頂いた。姜さんは詩人で文学博士でもあるという。私の好きな韓国の詩人申東晔や江戸時代朝鮮友好の第一人者雨森芳洲などの話を今度はゆっくりお聞きたいと思った。私にとって韓日友好とは出逢った一人一人の韓国人の心や精神を受けとめることからだと思っている。朝鮮通信使文化事業会の精神と私の探している原故郷とが重なり深まっていくことを心から願っている。私は帰国後に釜山の詩を十篇ほど書いた。その中の一篇を引用し、この小文を終えたい。

民主公園のハルミッコツ

夜明けの釜山港は 銀色皿の水

さざ波で 海面がちぢみ出し

黒から灰色にうつろう無数の諧調へと

天上の誰かが 銀色の筆を点描している

コモドホテルの窓から

朝の一番船が行き来するのを眺めていると

五六島の手前の海面に

天上から金色の光が注がれる

(略)

(「朝鮮通信使ジャーナル」十一号二〇〇五年十二月に掲載されたものの

原文でから多少長くなっている)

東京ファイブブリッジメンバーの紹介

1.田中正敏(たなかまさとし) クラリネット 1959年生まれ

10歳のときにクラリネットに出会い、1977年、国立音楽大学に入学。1981年、武岡賞を得て国立音楽大学を卒業。その後、フランス国立パリ高等音楽院へ入学。クラリネットをギイ・ドゥブリュに、室内楽をモーリス・ブルグに学ぶ。

現在も、演奏活動に加えて、東京学芸大、尚美学園大学の講師として後進の指導にも取り組む他、日本クラリネット協会の理事も努めている。また、全国各地でクラリネット講習会、吹奏楽指導など積極的に活動、演奏技術における指導にとどまらず音楽を通じて“人”を育てるその情熱的な教育方針は、各方面から絶大な信頼を得ている。

2.右近 茂(うこんしげる) クラリネット & サクソフォン 1963年生まれ

幼い頃見たハリウッド映画でスイング・ジャズに魅せられ、ジャズ・ミュージシャンの道を志す。世良譲を始め、多くのミュージシャンとの共演でキャリアを踏み、1988年にはスイング系テナー奏者として人気のハリー・アレンとテナーバトルを演じ好評を博す。現在は自己のカルテットの他、多くのグループで活躍中で、伝統とモダンをハイレベルで融合させた若手テナーマンの第一人者である。

3.八木隆幸(やぎたかゆき) ピアノ 1965年生まれ

ジミー・スミスのオルガンを聴きジャズに興味を持ち18歳の時にジャズオルガニストの酒井潮に師事し正式にジャズを始める。同志社大卒業後、プロミュージシャンとして活動を始め、その後ニューヨークに渡り、海外のミュージシャンと多くのセッション経験する。帰国後、FM・NHK「セッション505」などに出演する。

第24回浅草ジャズコンテストソロ部門でグランプリ受賞。

4.酒井一郎(さかい いちろう) ベース 1955年東京上野生まれ。

高校時代からベースを演奏し、早稲田大学在学中よりライブハウスなどに出演する一方、故いずみたく氏のミュージカル伴奏でも演奏。卒業後、平岡精二グループ、福原彰カルテット、テリー水島など、日本ジャズ界大ベテランとの共演他、ポップス、シャンソン、カンツォーネなど幅広い演奏経験も積む。NHKテレビ「ときめき夢サウンド」にレギュラー出演もした。ウッドベースとエレクトリック・ベース両面で演奏活動をしているが、確実なテクニックと共に、スイングジャズからモダンジャズ、ポップスなど、様々な音楽を的確に表現し得る数少ないベーシストである。その人柄は一見物静かであるが、ベースソロはメロディックであり遊び心が溢れている。

5.福田良子(ふくだよしこ) ヴォーカル 1977年生まれ

幼い頃父親が毎日聴いていたジャズに興味を持ち、学生時代に本格的なヴォイストレーニングを開始しプロ歌手を志した。現在では人の心を魅了すると評判の低音でパンチのある歌声で、ライブハウス、福田良子ディナーショー、CMソングなどでも活躍中。歌以外にも、料理、ワインなどにも精通して

いる。また公式トライアスロンにも参加し、日々、精神と肉体を鍛えている。CDアルバム「SUKIYAKI」もその完成度の高さに専門家にも絶賛されている。

◎釜山詩十篇(2005/9.6-8)

釜山ジェットストリーム 鈴木比佐雄

ーてふてふが一匹韃靼海峡を渡って行つた 安西冬衛

一つ目の巨大なバタフライの左羽に

一匹のトンボが紛れ込んでいった

パイロットは力強く語り始める

I WILL TRY ……

台風 号よ 今しばし静かにしておくれ

ピアニストが前座席の肩に手を置き頭を垂れる

サクソ奏者は拳を握り口元に緊張を走らせる

ベース奏者が目を閉じてジェットストリームを聞く

ヴォーカリストは叫び声を押し殺してゆっくり息を吐く

クラリネット奏者は口ずさむ 釜山はあまりに遠く陰し

南太平洋上から無数の水蒸気が立ち上り

偏東風に乗ったバタフライは九州で舞い続ける

どの地点で偏西風に乗にかえるか思案している

釜山をかすめている左羽は

ピアニストのように機体を叩き始める

機内の窓から風雨の釜山港が見えてきたか

ああ、釜山の誇る海雲台のホテル街や飲食街か

高層マンションや家々は

海中に揺れる藻草や魚のように

たよりなげに揺れて淋しげだ

九月六日 JR957便の機体は

金海国際空港滑走路へ侵入していった

機体はレベルダウンを繰り返し降りていった

衝撃音がして車輪が地上に届いた瞬間

後部座席の女子大生達から拍手が起こった

瞬間横風にあおられて片方の車輪が浮き上がり

機体はふたたび舞い上がり失望の音が渦巻いた

旋回し再度試みるが今度は滑走路に近づけなかった

I WILL RETURN……

数秒の釜山滞在で成田に引き返していった

三度目をやめて 引き返す勇氣
五人のマネージャーである私は
パイロットの勇氣をほめたたえ
トンボの中の五人と百数十人の命をいとおしんだ
TOMORROW WE WILL CHALLENGE……

ハルモニの願い 鈴木比佐雄

巨大な蝶々は独島(竹島)の上空を過ぎていったか
あの無人島にはタンポポ、ネコジャラシ、
ヨモギ、オオバコなどが生えているという
今も溶岩の固まった火山角礫岩にタンポポが咲いているか

翌朝のノースウエスト機は
晴天の上空を釜山へ飛んでいた
日本列島と日本海(東海)を眼下に見ながら飛んでいく
隣の座席には韓国のハルモニ(お婆さん)がいる

小さな島には霧が多く年に百六十日が曇り
年に百五十日も雨や雪が降るといふ
渡り鳥たちの避難島は
日韓の漁師たちの豊かな漁場だった

アンニョンハシムニッカ(こんにちは)
ネ アンニョンハセヨ(はい こんにちは)
オヌルン ナルシガ チョッスムニダ(今日は天気がいいですね)
ネ チョンマル チョチヨ(ええ 本当に いいですね)

眼下の無人島に五十年前から韓国の守備隊が暮らしている
台風14号の通過した頃 火山角礫岩が豪雨に削られ
きつと宿舎はゆれうごき海に流されるほどだったか
隠れる樹木の少ない島で鳥たちはどこに身を隠したのか

チョヌン スズキ イムニダ(私は鈴木です)
ソンハミ オトツケ デェシムニカ(お名前は何と言いますか)
チョヌン キム イエヨ(私は金です)
日本語が出来ますか
ええ、ちょっと出来ますよ
日本では楽しかったですか
万博などを見て息子たちと一緒に楽しかったですよ

韓国語と日本語は似ていますね
むかし私も日本語を勉強していましたよ
本当は韓国人と日本人は仲良くしたいんですよ
韓国語を学んでいるのですか
ええ韓国に詩人の友人たちがいて、彼らの詩を読みたいんです

釜山ではどこにお泊まりですか

コモドホテルですが よく知りません

ホテルから釜山港がよく見えますよ

近くには大きな市場がありますよ

楽しい旅をして下さい

ハルモニもいつまでもお元気で カムサハムニダ

独島(竹島)と日本海(東海)を越えて

ノースウェスト機は釜山金海国際空港に降りていった

五色の音の架け橋 鈴木比佐雄

ークラリネット・田中正敏

オーケストラをバックに

モーツァルトのクラリネット協奏曲を吹く

田中さんのいたずら坊主のような

素顔を前に こう語りかけた

一緒に釜山に行きましょう

日本の本物のジャズを聞かせに

メンバーはお任せしますから

じゃ 右近茂を入れましょう

実力のある彼にメンバーを任せましょう

鈴木さん バンドのネーミングを考えてね

東京スピリッツ

東京ノクターン(噴火湾)

ユーラシアの風音

ユーラシアジャズバンド

五人囃子

星祭楽団

サウンドスクラブチャー(音の彫刻)

アースシャイン(地球照)

音楽の惑星

水の惑星

光の籠

音の籠

ミッドナイト鈴虫

サイプレス(糸杉)

Edge(エッジ、突端)……

どうでしょうか

五人囃子がいいですね

でも東京も入れたいですね

東京スピリット いや

東京五人囃子ですか

星祭楽団も捨てがたい
欲をいえば架け橋という意味も欲しいですね
じゃ 東京ファイブ・ブリッジはどうですか
TFBですか そうしましょう

ベニーグッドマンのように
クラリネットを愛し
クラシックとジャズを共に愛し
田中さんは 真っさらな楽譜にするすると
国境をまたぐ五色の音の架け橋を描き始める

控え室の殺し屋 鈴木比佐雄
ーサククス & クラリネット・右近茂

サククス奏者は
別室に連れて行かれる
金海国際空港入国審査で
入念にサククスやクラリネットが調べられる
開けられたケースの部品を一つ一つ手に取り
上下左右に見入る係官の眼差しは
拳銃、麻薬の匂いをかぎつける鋭さだ

ピアニスト、ベース、クラリネット、ヴォーカルに
素早くコードを指示し、リハーサルを終える
夕暮れから闇夜に光る
釜山文化会館控え室で
本番を待つサククス奏者は
高らかにテナーを吹き鳴らしたあと
サングラス越しの不敵な眼差しで語り始める

今日も殺ってしまった
このテナーサククスには銃が組み込まれていてね
知り合いの女に頼まれてね
その女を捨てた男を殺してきた
おまえたち 分かるかい
人を殺したあとは、寂しいものさ
心が氷のようで こんなクールな気持ちで
今宵もプレイするでしょう
明日はどんな女から依頼があるだろうか
どんな男を殺してしまうだろうか

釜山の夜が更け
サククス音色が響きわたる
音にこんなに色気があるのは
捨てられた女や多情な男の
尽きせぬ情念が乗り移っているからなのか

今宵 釜山の若者達をうっとりさせ
熱狂させるスピリットは何なのか

浜辺に打ち寄せられる異国の魂のように
韓国の恨がジャズの魂を引き寄せている
ハリー・アレンとテナーバトルを繰り広げた
ステージの殺し屋は
スタンダードジャズの伝道者となり
全身がサックスのリズムと化して
聞くものの皮膚を赤く染めている

釜山の夜空を仰いで 鈴木比佐雄
ーヴォーカル・福田良子

二十年前に坂本九の乗った飛行機が御巢鷹山に落ちた時
どんな悲鳴をあげたのだろうか
真似のできないパンチの効いた歌声が
日本人の心に永遠に刻まれて涙を誘った

黒いステージにスポットライトが当たり
真っ赤なドレスを着た福田さんが現れた
会場に向かうバスの中で短い挨拶文を頼まれ
私は彼女の思いを拙い韓国語に訳して手渡した

一礼をして歌い始める
オペラ歌手のような豊かな胸元から発せられた
衝撃的な声量は会場の誰をも引き込んでいた
透明な歌声が胸の奥底に届けられ引っ掻き始める

I look up when I walk
So the tears won't fall
Remembering those happy spring days
But tonight I'm all alone……

英語の歌詞を終えると
サックスとピアノとベースがスイングする
即興的な演奏がこれがジャズだと語り続ける
ヴォーカルを恋い焦がれるように待ちながら

上を向いて 歩こう
涙が こぼれないように
思い出す春の日 一人ぼっちの夜……

坂本九の魂が福田さんに乗り移り
二十年後の釜山文化会館で
日本語の「上を向いて歩こう」が奇跡のように響き渡る
きっと韓国人の胸にも悲しみが伝わっただろうか

福田さんはドレスと胸の間からメモを取り出す

アンニョンハシムニカ パンガプスムニダ

チョヌン フクダヨシコ イムニダ

オヌルン チョデヘ チュショソ カムサハムニダ

アプロ チャル プタカムニダ

（こんばんわ お目にかかれて嬉しいです。

私は福田良子です。本日はお招き下さり感謝致します。

これからも 宜しくお願い致します。）

満場の拍手の中で大切にメモを胸にしまい

深いお辞儀をし 次の「さくら さくら」を歌い始める

沈黙のメロディー 鈴木比佐雄

—ベース・酒井一郎

いい感じですね 問題ないですよ

私と連れだって長身の酒井さんは
他のバンドのリハーサルを聞きながら
ステージの音響設備をチェックする

数百万もするウッドベースを釜山に運ぶことが出来ず
釜山でも揃えることが出来ないといわれ
エレキベースを肩に背負ってやってきた
もの静かで頼りになる電信柱のような存在

東京ファイブ・ブリッジのリハーサルを聞き
ベースはジャズの背骨のような存在なのだったと思った
そのまわりに華やかなサックスの音が絡みつく
ピアノと追いつ追われつ曲の骨格を仕上げる

ピアノの光がベースの影によって
音色がいっそう輝いてくる
サックスは二色の音に乱入して
虹色のような音をまき散らす

ベースは音楽の基本
音楽の原点は沈黙
沈黙に最も近い音がベース
酒井さんはベースそのものの存在

東京ファイブ・ブリッジの演奏した曲
My Baby Just Cares For Me、鈴懸の径、
さくらさくら、上を向いて歩こう
合同演奏した曲 聖者の行進、S.T Thomas、
アリラン、釜山港へ帰れ
全てのベースを田中さんは一人で弾き続けた

打ち上げのジャズクラブで見つけたウッドベース
他のメンバー達とお礼にといい閉店まで弾き続けた

ジャズを楽しむ心という基本を
韓国の若者たちに伝えてくれたナイスガイ

アフリカから連れてこられた黒人たちの悲しみ
そんなジャズの魂が日韓の深い溝を越える
二十一世紀は互いの痛みを共有出来る日が来るだろう
酒井さんはウッドベースを優しく愛撫し続けている

アリラン峠の少年 鈴木比佐雄
—ピアノ・八木隆幸

ジミー・スミスのオルガンを聞き
オルガン奏者になりたいと志した少年がいた
スミスの歯切れのいいオルガンの旋律に
少年は虜になってしまった

坊主頭の八木さんは
いつも少年の眼差しをしている
指先の集中力が鍵盤に注がれ
右近さんの掛け声に合わせて弾き出される

天才的な記憶力で楽譜の必要がなかったスミス
八木さんの指先も譜面が一瞬のうちに甦るのか
オルガンからピアノに転向したあとも
経歴にスミスとの出会いを記すのは初心を忘れないため

ピアニストからアリランの調べが弾かれる
戦前この歌は日本軍から歌うことを禁止されていた
今その歌を韓国と日本の歌手が共に歌い
観客も一緒になって歌いはじめる

アリラン アリラン アラリヨ
アリラン峠を 越えて行く
私を捨てて 行かれるあなたは
一里も行かぬ間に 足が痛む

アリラン アリラン アラリヨ
アリラン峠を 越えて行く
高い空には 星くずが多く
我が家の暮らしも もめごとが多い

韓半島の恨はいまもこの歌から流れ続ける
歌詞は恨みをつづっているが
メロディーはいつの日にか
再会や和解を夢見る希望の旋律でもあるのだ

釜山の野原で見かけたトンボはどこへ行ったか

夜の峠に向かって舞っているか

八木さんのメロディーは「釜山港へ帰れ」に代わり

観客は総立ちになって地鳴りとなって響いていた

夜の釜山文化会館にはジャズの合同演奏が響き渡り

終戦から六十年 日韓条約から四十年が過ぎ

日韓のアリラン峠を軽々と越えて

少年の眼をしたピアニストが虹の架け橋を奏でるのだ

釜山の果物　　鈴木比佐雄

リハーサルのあと　コモドホテルでシャワーを浴び
軽食を済ませてまた釜山文化会館に向かう
秋の街角には車道にあふれそうに
アジュモニたちが皿に果物を並べて売っていた
梨、蜜柑、林檎、栗、瓜のような果実
会館に向かう自動車から降りて
私は　オルマイムニカ　と
アジュモニたちに話しかけ
秋の果物を山ほど買ったかった
渋滞する車の脇で酸味の多い韓国の果物たちが
夕暮れの光を浴びている
梨、蜜柑、林檎、栗、瓜のような果実と
アジュモニたちの命は色濃く輝き始める

巨大なバタフライの羽
台風14号が釜山を叩いて
私たちが釜山の上空をさまよっていた頃
国際ガイドの李さんは空港で私たちを待っていた
その時に電話が入って
李さんの娘さんが交通事故にあったと
知らせが入り病院に向かった
李さんの娘さんの命は大丈夫だろうか
今夜のコンサートには来れるだろうか

会場の入口で関係者たちと話していると
半年ぶりの李さんが入ってきた
陽気な李さんが元気がない気がする
　　オレガンマニムニダ　アンニョンハセヨ
　　良く来て下さいましたね
　　お嬢さんは大丈夫ですか
そういうだけで胸がいっぱいになった
　　足を傷めましたが　命には別状ありません
　　ケンチャナヨ
と心配を打ち消すように眼に光が射してきた

素敵なバンドを連れてきましたよ
コンサートと一緒に聴きましょう
お嬢さんの足が早く良くなるといいですね
（街角で見つけた秋の果物を持って
お嬢さんのお見舞いに行きたいです）
そう李さんに話そうと思ったが言葉が出なかった
コンサートを李さんは楽しそうに聴いていた
スズキさんとは 釜山を案内しながら
ゆつくりと お話したかった
また お会いしましょう トマンナヨ
秋の果物の香りと輝きを残して
李さんは病院へ戻っていった

民主公園のハルミツコツ 鈴木比佐雄

夜明けの釜山港は 銀色皿の水
さざ波で 海面がちぢみ出し
黒から灰色にうつろう無数の諧調へと
天上の誰かが 銀色の筆を点描している

コモドホテルの窓から
朝の一番船が行き来するのを眺めていると
五六島(オリョクド)の手前の海面に
天上から金色の光が注がれる

呼び出し電話が鳴り
国際ガイドの河さんが呼んでいる
釜山港の景色に後ろ髪を引かれながら
丹青で彩られたホテルを後にする

海雲台(ヘウンデ)に行く前に
もう一度釜山港を見せてくれませんか
民主公園記念館の展望台に行きましょう
鈴木さんの好きな野草も咲いているから

そこは韓国民主主義の苦難の道を考えさせられる場所
一九六〇年四月革命、一九七九年釜馬民主抗争、
一九八七年六月抗争の歴史を記した場所
民主公園は 自由の女神の篝火をオブジェにしていた

高台の周りは樹木園になっている
ツククサの青色の花が飛び込んできた
ヨメナ、タデ、トラノオなど
日本でも見なれた野草が群れ咲いていた

その場所には翁草の写真があり
韓国語でハルミツコツ(お婆さんの花)と記してあった

なぜ銀色のピロードのように光る花を
日本語ではお爺さん草、韓国語ではお婆さん花なのか

韓国の民主主義を創り上げた闘士達を記録した場所
ここには四百種もの樹木や野草が息づいています
記念館女性職員の鄭さんは穏やかに語る
また いらっしゃってください お元気で

釜山港に日が昇り 旅人の私は帰り支度をする
眼下の釜山港は神々しさが消え 誰もが働き始める
デモクラシーパーク ここは釜山市内と釜山港が一望でき
民族和解を願う魂が地に降り注ぎ
野の花と化して息づく場所なのだ

洛東江(ナクトンガン)のアキノノゲシ 鈴木比佐雄

金海(きむへ)国際空港で待つメンバーを追って
車を走らせていると洛東江が見えてきた
台風の上空から見た陰しい河面は穏やかだった
河さんに頼んで河原に降ろしてもらった

水草の浮く河に手を入れ掬った
韓半島の山河を削った濁りが
秋の日の光で目に沁みた
そして 手を浸して また戻した

一部がコンクリートで固められていたが
野草が水辺に広がる岸も多い
土堤には貴婦人のような上品な花
薄黄色のアキノノゲシが咲いていた

アレチノギク、ヒメジョオンのような野草が群生し
しゃがんでみるとイシミカワに似た野草があった
緑の玉が青や藍などに色づいてくるだろうか
この野草を上流に住んでいた少女も見ていただろうか

六十年前の記憶をもとに書かれた慶尚南道(キョムサンナムド)の地図
釜山からの鉄道は、進永(チンヨン)、馬山(マサン)、文山(ムンサン)と進み
晋州に至る地図を妻の母が記した
晋州に流れていた河は洛東江から別れた南江だ

思想犯で捕まったクリスチャンの朝鮮教師を励ますため
祖父は何度も刑務所に出かけていったという
終戦時に殺された校長もいたというが
祖父は教師たちと別れを惜み白十字船で鎮海(チンヘ)から帰国した

洛東江の上流を眺めていると

背後から誰かが眺めている気がする

母や祖父たちだけではない

砧で白衣を打ち大昔のハルモニたちや古代人の眼差しだ

どんな状況であっても

ナショナリズムを越えた友情は存在するだろうか

独島(竹島)問題で揺れる間 我々を呼び寄せた

「朝鮮通信使」の金局長、李さん達の強い架け橋

河原に催促の携帯電話が鳴り

メンバーが空港で昼食をするからと待っている

美しい貴婦人の咲く秋の日の洛東江よ

アンニョンヒ ケシプシヨ(さようなら)